

---

# 色褪せない木漏れ日に。

翠寿きゆま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

色褪せない木漏れ日に。

### 【Nコード】

N8424G

### 【作者名】

翠寿きゆま

### 【あらすじ】

仕事で業績を上げ、後に会社を設立し、それなりに富と成功を手に入れていた青年。嘗てない不思議な感覚の中で、故郷への遠い記憶を彷徨いながら、淡い恋心と共に心の旅をする。

## Story 1、導かれし道

『色褪せない木漏れ日に。 Story 1、「導かれし道」』

僕は夕暮れに染まる窓の外を見、数年前のあの光景を、思い出していた。

この街にはもう、あの時の小さな区営住宅の同じ建物も、小さな商店街も

そして小さな公園ももうない。しかしその一角にあった広場とあの場所だけは

今も変わらず人々が集い、そして今日も盆踊りが開かれている。それは僕に

とつて必然のようで、必然ではなく……。今考えると、導かれし道の様に思える。

今も何も変わらず盆踊りで人々が、広場を賑あわせている……。。

あの過去の暑い日々も、何事もなくてただ静かに、時間だけが過ぎて行っただかの様に……。

>>忙しい日々<<

本当の幸せってなんだろう……。なぐんてちょっと重たいことを考えてしまった。>>僕の名前はゆずしまたかし柚島隆年齢は28歳、独身<<会社で数年業績をあげちよっと早いとは言われたけど、後に起業しそれなり

以上の収入に、それなり以上の生活に多分こう言う人生を世間では一応それなりに成功していると、言われるんじゃないかって思っただけど……。

でも自分ではそれもよく解らないでいる。

何が成功なのかも、何が失敗なのかも、そして何が本当の幸せなのかも……。

とにかく今は、仕事をするだけで日々頭がいっぱいなんだ。

僕は忙しい毎日を送っていた。そんな中、何度となく送られてきた古い友人からの手紙や、同窓会への誘いも、すべて記憶の片隅に追いやっていた。

>> 突然の知らせ<<

故郷のお袋から、突然の知らせが届けられた。城山さんの母親が亡くなったと言う知らせだ。その名前を聞いて僕はとっさに誰のことを言っているのか、全く思い出せずにいた。

しばらくして、ひとりの女性から僕宛てに電話が掛かってきた。

みき「突然でごめんなさい。>>城山みき（しろやまみき）<<です。隆くん私を覚えていますか？」

隆「あつ。」

僕はその声に、確かな聞き覚えがあった。 かつ彼女はっ！、そう思った瞬間

僕の脳裏に昔住んでいたあの小さな区営住宅での片隅の日々が、一気に甦り始めたのだった。

僕は何だかとても大切な事を、忘れていたのかも知れない……。  
ふと何気なくそんな気持ちになった……。しかしそう思った根拠は何処にもない。

そうまだこの時の僕は、何も気がついてはいない……。

>>二度目の知らせ<<

気がつけば僕は、遠い記憶を辿っていた……。何も心に感  
じずに……。ただ昔を思い出していた。遠いあの日の事を……。

しばらくして、盆休みに入った。しかし仕事は山積みで、休んでい  
る暇など到底ない。

だがそれは自分自身が起業し、会社を営む以上、人任せにばかりは  
してられない

のだから……。思う様にだって休みが取れないのも、ある意  
味仕方のない事だと

何処かでそう諦めていたからだ。そんな時……。故郷のお袋  
から電話が……。

隆の母「もしもし、隆、元気かい？」

お袋の声は、どことなくやつれた様に聞こえた。

隆「元気だよ。」

隆の母「覚えているかい？この前、城山さんのお母さんが亡くなっ  
たでしょう。それでね  
今年が初盆だから、こちらで色々とお手伝いをする事になってるの  
よ。

隆だつて城山さんの娘さんとは、同級生だったんだし、ご近所同士  
で親しかったのだから

出来れば一度くらい顔を、出しておやりなさいよ。」

僕は山積みの書類に、ふと目をやりながら……。

隆「そうだね、何とか時間が取れそうなら一度、そっちへ帰るよ。」

僕は、ただ何も考えず、何気なくそう言った……。

そして……。

電話を切った後、僕は何事もなかったかの様に、書類を片付け始め  
た。

しばらくして……時計を見ると。

（はぁ……もうこんな時間、とうとう朝まで眠れなかったな  
〜。）

時計の針は、早朝の5時半を指していた。

（ちよつと眠い、今から少し寝ようかな〜……。）

>>夢の中の誘い<<

僕は、夢を見ていた。遠い昔の記憶、同じ形の小さな住宅が並ぶ一角。

遠くに海の見える街、しかしその海は青々として美しい訳じゃない。どちらかと言えば黒々としている様にも見える。僕が家の中にいると、

何処からともなく、どんどんと水が流れてきて、家の外をとても綺麗な水が

川のように流れ出している。その光景に、僕は少し気分が癒される。

そんな夢の中で城山の母親が、僕を車の助手席に乗せて大きな橋を渡るうと

した。

みきの母「隆君、久しぶりだね、おばさんが君の実家へ乗せて帰ってあげるよ。」

夢の中の城山の母親は、笑顔で僕にそう言ったのだ。

しかし夢は橋を渡る丁度真中辺りで、目が覚めてしまったのだった。

ふと目が覚めた僕は・・・・・・・・。。。

(何だか不思議な夢を見てしまったな。)

そう思うと又ひたすら、仕事に取り掛かり始めた。

>>導かれし道<<

必死で取りかかったせいなのか、思ったよりも順調に仕事が片付き、  
漸く少し

休みが取れそうになったのだ。そんな時、思ってもみなかった故郷を  
僕は何処かで、少し気に掛けていたのかも知れない。

（そうだな、久しぶりにお袋の顔でも見るかな、それに、祖父  
母の墓参りも

出来ればしたいし、帰ってみるかな。．．．．．故郷へ。）

そう思うとすでに軽く荷物を纏め、気がつけば僕は、新幹線に乗っ  
ていた。

日頃の疲れから、うとうとしながら故郷の街を目指した。新幹線を  
下りると

今度はバスに乗り、実家を目指す。そしてバス亭を下りると．．．  
．．．。

（この街も変わった様で変わっていないな。．．．．．）

もうあの小さな区営住宅の集合体も、何処にも見当たらず、そこに  
は、

綺麗で新しい、高層マンションが立ち並んでいた。

あの小さな商店街も．．．．．。あの小さな公園も．．．  
もう

何処にも見当たらない．．．．．。

そして10年前に新しく引っ越した、僕の実家さえも見違えるほど、  
高い建物に

困まれ信じられないくらい小さくなった気がした。

（うーん僕の実家って、こんな場所だったのかな？……………。）

## Story 2、遠い日の予感（前書き）

不思議な夢に誘われ、実家のある大阪を目指した隆。そこにあつたものとは、古い思い出と新たな記憶、恋の様なそれとも懐かしさの様な、上手く言い表せない感覚の中、言い知れない予感が、遠い未来を模索する。

## Story 2、遠い日の予感

『色褪せない木漏れ日に。Story 2、遠い日の予感』

>>久しぶりの実家<<

久々、実家に帰った僕は、何もかもが、何だかとても照れくさく感じた。

お袋の顔を見るのも、姉貴の顔を見るのも、甥っ子や姪っ子達に伯父さんと呼ばれる事も、何もかもが、ちょっぴり照れくさく感じた。

家族は、僕を笑顔で迎えてくれる。そんな光景は昔と何ら変わりはないけれど

この光景も、何時まで見ていられるんだろう。あの風景の様に、何時かは又

思い出に変わっちゃうのかな……。そう思うと、少し寂しい気分に

もなる。姉貴が久々だから僕を捕まえて、楽しそうに話す。その話の中に

突然……………。

姉「みきちちゃんを、覚えてるでしょう？聞いてるとは思っけれど、今年

お母さんが亡くなってね。みきちちゃんって、隆と同じ年でしょ？お母さんも

うちのお母さんと同じくらいなのね。まだ若かったらうに、可哀想ね……………」

隆「あゝ聞いてるよ……。大変だったみたいだね。」

姉「一度、みきちゃんに会ってくれば？きつとみきちゃんも隆に会えると」

昔が懐かしいって喜ぶわよ。」

隆「そっかな……。。」

この前の電話の事は、姉貴には言わずに……。僕は……。僕は心の中でひとり考えていた。あの電話は、一体何だったのだろう。

そう、あの電話の話の続き……。僕は妙に引っかけた。いたんだけど。

そうだな。一度直接、みき本人に確かめてみるかつ。

そう思って僕は、携帯の画面を見つめていた。

姉「さゝ連絡してあげなよ。」

姉貴のその言葉に、僕はうなずき……。

隆「うん、そうだね……。。」

>>遠い記憶<<

盛夏の暑いこの時期、そう田舎でもない一角に蝉の声と、太陽の照りつける暑さが

とても眩かった。そんな中、僕は、同級生のみきの家を訪ねる。

静かな佇まい、少しひんやりした奥の間へ通される。

僕は深く頭を下げ挨拶をする。そして、みきの母の祭られた仏壇に手を合わせた。

みき「来てくれてありがとう。母もきつと喜んでるよ。」

隆「実は少し聞きたい事があって……。あつ、あの突然だけこの

前の電話の話……。」

みき「あつ、何でもない、気にしないで、それより懐かしいね……。」

隆くんは随分変わったね。一緒に遊んでいた頃とは、何だかとても見違えるよう。」

隆「そつかなあ……。」

みき「立派になったね。ちょっと羨ましいな。そうだ！これから時間取れる？」

行ってみたい場所があるの。」

隆「何処へ？」

僕はみきに言われるがまま……。後を着いてった。そして……。

みき「ね、この場所を覚えてる？」

みきに連れられ、辿り着いたその場所とは……。嘗て僕達が大切にしていた、僕達だけの場所だ。

多分ずっと昔には看板や広告を立てる為に使われていたであろう、あの  
コンクリートと鉄でできた古いオブジェの様なもの、昔はよくあれ  
に上って  
遊んだよな〜……………もうこんなに錆ついてしまってるけど……………  
……………  
そしてこの小さな噴水も懐かしいや〜。それ以外には何もない僕達  
だけのこの  
遊び場で、あの頃は色んな事を創造したんだよな。本当に懐かしい……………

みき「この場所は、私達の場所、周囲がビルや大きな建物で、どんなに  
形が変わっちゃっても、小さなこの場所だけは、今もそのままなの  
よ。」

隆「うん……………。」

>>変わらないもの<<

みき「ね〜、今日は丁度盆踊り大会が開かれるんだよ。覚えてる？  
昔一緒によく踊った広場。今でもまだあるんだよ。もしかしてもう  
夜店出てるかな〜  
ね〜、ちよっとだけ覗いてもいい？」

そう言っ僕の手を引くみきの姿も……………あの頃のままだ。

みき「母が亡くなった年なのに、ちよっと不謹慎かもしれないけど、  
今晚少しだけ

会えないかな。」

僕「えっ？」

みき「そんなに驚かなくても、今日は盆踊り大会でしょ？折角会えたんだし

一緒に行こうよ。」

隆「ああ〜うん。」

それから僕は実家に一度戻って、みきを待っていると、しばらくしてみきは見違える様な

浴衣姿で僕の元へとやってきた。何だか僕の胸の鼓動も、少し高鳴ってる気がする。

幼馴染だったはずの、みき………凄く綺麗だ。

みき「子供の頃は、広場がとても遠くに感じられたけど、隆くんの新しい家からこんなにも近かったんだね。」

隆「そうだよね。」

みき「ね〜かき氷、買おうよ。何がいい？イチゴ？それともみぞれ？」

隆「あっじゃ〜僕はイチゴにする。」

この時の二人は、あの頃と何も変わらず、ただ年甲斐もなく純粹でそして無邪気で

何もかもがそのままの気持ちで、いられた気がした。

>>黄昏の道<<

みき「今日は有難う。又ひとつ楽しい思い出ができたよ。」

隆「僕こそ、楽しかった……………」

みき「だって、離れてちゃ、そう滅多に会えないんだもん。」

隆「……………」

みき「でもこんな事言っちゃ迷惑だよ……………。勿論、隆くんには東京で

綺麗な恋人がいるでしょうね。でも今夜だけは許して〜！笑」

隆「いや〜別にいないし……………。みきの方こそどうなんだよ……………」

みき「ごめん、変な話しちゃった。あははっ今のは、なし。あっそうそうこの道歩いて

いたら昔、隆くんのおばあちゃんが歌ってた鼻歌を思い出すよ。何だったかな〜。

覚えてない？」

隆「月の夜？だった？」

みき「もっとタイトルが長かった様な……………うーん。笑」

そう言いながら突然振り返ってみきは……。

みき「あつ明日も会える？折角戻ったんだし、何処かへ行こうよ。」

隆「おいおい、お袋さんの初盆なのに、そんな事でいいのかよ。」

みき「うん、平気だよ。だってもう……どれだけ時間があっても足りない気がするから。」

隆「ええっ？」

みき「………何でもないよ。笑 ただ普段は離れているし早々会えないから………って意味だよ。ねっ、たまにはいいでしょ？」

隆「うん………いいよっ。」

僕はあの電話での話を、まだ聞き出せないでいた。でもこの時点でその事をすっかり忘れてしまっていた事も、事実だったからだ。

>>あなたに会いたかったから<<

みき「ねっ、隆くんは、ユニバーサルスタジオへ行った事ある？」

隆「それが・・・、一度もね〜よっ!」

みき「私も〜同じ、地元だとそう行く機会なんて、逆にないんだもん。」

隆「そうなんだ。うん、行ってもいいよ。」

みき「久しぶりに戻ったんだし、散策しに行ってみようか?」

隆「けど盆にこんな事やって、本当にいいのかよ。大丈夫か全く・・・。」

みき「いいんだよ。だって、ずっと会いたかったんだもん。」

隆「ずっとつて・・・。」

その時の僕は、みきの切実な言葉を、全く噛み締められないままだった。

何故なら、僕はこれから起こりうる事実を、全く予測すらできなかつたからだ。

>>つかのまの幸せ<<

僕は、久しぶりに地元の下で、そして幼馴染のみきと一緒に、仕事を忘れ、ただ童心に帰り、そんな少ない日々を楽しんだ。

東京へ帰る日、みきは僕にサヨナラは言わなかった。ただその代りにみきが

言い残した言葉は・・・。

みき「良かった……。隆くんが昔と変わらずにいてくれて、もう、こんなちっぽけな暮らしも、私の事もすっかり忘れられたと思ってた。だから本当に嬉しかったよ。覚えていてくれて、ありがとう。」

みきはうつむき加減で、寂しそうな目をして言った。

そんなみきを見ていると、彼女が何処か遠くへ行ってしまうんじゃないかって

一瞬、言い様のない怖さを感じた気がした。

新幹線の中で僕はひとり考えていた。東京と大阪、遠距離恋愛するには

さほど支障を感じないんじゃないかって……。他の場所ならともかく、交通には

そこまで不便な場所に、互いが住んでいる訳でもないし、こうやって新幹線に乗ってしまえば、又いつだって会えるんだし。

でも待てよ、みきにいい人がいるかも知れないし、いやもしそんならきつと

葬式にも来てたはずだと思っけど、姉貴もそれらしい事は何も言っ  
てなかった訳だし

なんてそんな少し前向きな空想の中で、自分なりに答えを模索しながら、僕は

東京までの道のりを酔いしれていた。

(ふう〜、又、明日から忙しい日々が始まるし、仕事の事で頭がいっぱいに

なるんだろっね。これが、束の間の幸せってやつなのかな……)

### Story 3、伝えられなかった思い（前書き）

突然の知らせに戸惑う隆。みきの死を受け入れられないままに、時だけが過ぎて行った。しかしみきの思いを知った隆は、本当の意味で、彼女の死を受け入れる事が出来たのかも知れない。

## Story 3、伝えられなかった思い

『色褪せない木漏れ日に。Story 3、伝えられなかった思い』

>> 仕事に明け暮れる日々<<

東京へ帰った僕は、又忙しい日々を追われていた。

この前の故郷での出来事も、又みきの事もすっかり忘れてしまう位に僕は毎日毎日忙しく働いた。

丁度、あれから2か月が経とうとした頃だった。早朝に一通のメール。

（こんなに朝早く、誰からだろう・・・。）「あっ、みきからだ！」

慌てて僕は、メールの内容を確認する。

『この間は、楽しかったね、ありがとう。又いつか戻れる日があったなら

必ず連絡してください。待ってます。 みき』

僕は相変わらず忙しいけど、みきも元気そうで良かった。

しかしそれからしばらく、みきから音沙汰もなく、そして又僕は忙しい

日々明け暮れていた。

>>止まった時間<<

あれから一年が過ぎた。忙しい毎日の中、僕も故郷やみきの事ばかりを

考えている訳にもいかず、あの日の記憶が遠く薄れかけ始めた頃のことだった。突然、姉貴から電話が掛かってきた。

姉「隆……、落ち着いて聞いてね。みきちゃんが、昨日亡くなっただよ。」

隆「えっ？どうして？」

その時の僕は、何度も耳を疑った。電話の向こうですすり泣く姉貴の音が

意味をなさなただの音の様に聞こえた。

姉「誰も知らなかったの、彼女は誰にも言わなかったのよ。重い病に

侵されてた事も何もかも、独りっきりで抱えてたんだよ。」

隆「そんな……。。。」

姉「暦で一日通夜が伸びて今夜になったの、今夜は私が代わりに出るから

突然だけど、明日こっちへ来れる？」

隆「そんな急に……言われても……去年、あんなに元

気だったのに  
何だか、全然信じられないよ。」

(又……あの日の様に、暑い夏の日だ……)

>> 別れの時<<

大阪の空は曇り時々雨、小雨の降りしきる中、みきの葬儀が行われた。

遠い親類や知人、彼女が生前親しかった友人や、幼馴染、そして昔のクラスメート等が

次々と弔問に訪れた。小さな葬儀だと思われたが、いつの間にか知らず知らずに入々が集まり、長い列をなしていた。

そして僕はみきの安らかな姿に、献花を手向けた。彼女はとても幸せそうで

ただそこに眠っている様にしか見えなかった。(これが、みきの姿を見る最後なんだ。)

そう思うと、僕は居た堪れない気持ちになった。もう引き返せないんだ……。

そう言えば、あの時みきが言いたかった事は、病いの事だったのかも知れない。

きっと誰かに言いたかったんじゃないかって……。

必死で病と向き合ってる事も、誰にも言わずに逝っちゃうなんて、何だか卑怯だよ。

いや違う、もっと僕が察していれば、みきは話してくれたかも知れ

ない。  
そうすればもつと力にだって、なれたのかも知れない。  
そう思うと、気がつけば、僕は自分自身を責める事で、精一杯にな  
っていた。

（去年みきに会った時の僕はみきの苦しみも知らずに、みきを恋人  
にしようだとか  
遠距離恋愛も悪くはないだとか、そんな事ばかりを考えていたんだ。  
）

何だろう……。その時そんな自分が、堪らず許せなくなったん  
だ。。。。。

>> 乗り越える為に <<

みきの死を受け入れられない僕は、東京へ戻ってから、又がむしや  
らに働いた。

一時でもいい、何だろう、悲しみ？ 自分に対する嫌悪感？ それとも  
罪悪感？

解らないけど、とにかくじっとしていられなかったからさ。。。。  
。

もしかして僕はみきを好きだったのだろうか、今となってはそれも  
解らないはまだ。

でも一つだけ言えるとしたら、僕はみきの為に、何もしてあげられ  
なかった。。。。  
その思いだけは強く残っちまっている。

（今日も暑い、暑くてもうぶっ倒れそうだった。）

>>届けられなかったメール<<

あれから何日が過ぎたのだろうか、季節は変わりやがて寒くなり、又新しい年を迎え、僕も今年は30歳だ。もうすっかりいい大人だな。

そろそろ、結婚でも考えようか……。そうだ……。とその前に、みきの一周忌だ。忘れるなんて、出来ないよ。しかし又暑くなりそうだな。

そして、僕はみきの一周忌の法要に出席する為、又暑い夏に故郷を訪れた。

あの日と変わらず窓から眺める景色は、又あの盆踊りの準備に追われてる

広場の景色だった。あの日と同じ。みきの母親が亡くなった知らせを受けて

盆休みを取ってやってきた時も、そしてみきが亡くなった知らせを受けた時も

僕の実家の、そして僕の部屋の窓から、臨む事ができるあの景色だけは、例え

誰がいなくなっても、決して変わる事がなく……。僕がただ無言で外を眺めていると、姉貴が部屋へ入って来てそして……。

姉「隆、もう自分を責める事も、そろそろ辞めなさい。みきちゃんが、本当に望んでた事を、今の隆なら理解できるでしょ？はいっ、みきちんの携帯電話。

この中には、彼女が嬉しかった日々も、苦しんだ日々も包み隠さず、

すべてが

詰まっているのよ。そしてその、届けられなかった宛先……。  
。これは隆

のものだからちゃんと持ってなさいね。」

隆「……………」

姉「それじゃ私は、お母さんのお手伝いするから……………」

そう言っつて姉貴は僕の部屋を出て行った。

(みきの思い……………。保存されたメール？すべてが僕宛てだ。  
何故……………)

もしかすると彼女は、僕に心配掛けさせたくなかったのか……………。  
。みきはずっと独りで、闘ってたんだ……………。

>>悪魔との日々<<

僕はみきのメールをひとつひとつ、丁寧に読んでいった。

2月14日、バレンタインデーだね。外は雪、隆くんチョコレート  
渡したいけれど……………。届くかな。

4月1日、エイプリルフルだね。どんな嘘を付こうか迷っちゃっ  
よ。

隆くんは、誰にどんな嘘を言っつて楽しませるの？

そんな無邪気で他愛もないみきの文章に、微笑ましく思った。しかししばらくすると

6月30日、怖いよ、私はこのまま独りで、死んじゃうのかな。

7月6日、痛いよ、苦しいよ。でも隆くにメール送ると、心配される……。

心配掛けたくない。こんな姿見せたくないよ……。

7月10日、隆くん、私はあなたが好きです。ううん、ずっと好きでした。

こつちかな、でも言えなかったよ。だってもしお互いに両想いになれたとしても

私は、もうすぐいなくなっちゃうかも知れないから。私はあなたに悲しい思いを

させたくないから、それって私の思いあがりですか？

8月9日、最近、意識が朦朧として、何も考えられない。隆くん、もうあなたの事も

あなたの顔も、思いだせなくなっちゃうのかな。

8月12日、私は、生きる！絶対に生きる！こんなちっばけな悪魔に負けたりなんかは

しないよ。でももし私がいなくなった時の為に、大好きな隆くんへ伝えて置きたい事があります。ね、聞いてくれますか？

>>みきの思い<<

隆くん、今どんな事を考えていますか？隆くんがこれを見る頃は・・・。  
うっん、あなたの傍にいられたらいいな。あの日、隆くんが東京の大学へ

行くと言って大阪の街を出て行った日、私の心の中に一つの思いがありました。

それをあなたにずっと伝えられずに、もう何年も経っちゃったんだね。

それからしばらくして、隆くんが仕事で成功していると聞かされました。

私はとても嬉しく思いました。その気持ちを、伝える勇気がその時は無かったけれども、遅くなったね。今なら言える、おめでとう。

私の思い・・・それは、隆くんが例え、どんなに立派な人になつたとしても

あの小さな区営住宅の一角での暮らしは、捨てないで欲しいよ。決してお金が沢山

あつて裕福な暮らしが、そこにはあつた訳じゃないけれど、隆くんの今の生活から

すれば、ちよっぴり貧乏で他の人には、言いたくはない過去なのかも知れないけれど。

お金なんか無くつたつて、あの日々は今も変わらずに、一番幸せだつたと思えるよ。

だから・・・隆くんも、小さな幸せを忘れずに、これからも大切にしてくね。

そこにはみきの、小さくて本当は大きな思いが・・・ぎっしりと詰

まっていた。

僕はきつと、何かを忘れていたのかも知れない……。

Story 最終話、思いは死なない。(前書き)

例え亡くなってしまっても、誰かの心の中に、生き続ける事が出来るだろう。病魔と闘い、最期まで前向きに生きたみきが、心の中で生き続けていると、僕は実感できたから・・・。

## Story 最終話、思いは死なない。

『色褪せない木漏れ日に。 Story 最終話、思いは死なない。』

>> 進み行く時間 <<

みきの思いを知って、僕は少しだけみきの死を受け入れる事が出来た様な気がした。

死んだ人はもう二度と戻っては来ない。そして今日も又あの日の様に、何も変わらず

広場の夏祭りが行われ、きつとここに嘗て暮らして人々が、誰もいなくなつたとしても

変わることもなく止まることなく時間は進み行くのだと思う。

（みきは僕を思っていたのだろうか。）今となればそんな事よりもみきが

僕に伝えたかった事、小さな幸せを忘れないで欲しいと言う事。みきはあの幼かった

日々から死に逝くまで純粋な気持ちのまま、変わらずに故郷を愛し暮らしていた。

少しばかり富を得て、沢山の部下を得て、そう思うと、僕はみきとは正反対の道を歩

んでいたのかも知れない。それが悪い事ではないけれど、今の僕はただほんの少しだけ

変わった気がする。

>> ほんの少しだけ <<

東京へ戻って僕は以前と変わらず働いた。部下を引き連れ働き詰めだった毎日。

しかし今は少しだけ……………。

部下「今日仕上げないと、間に合いませんよね……………」

隆「あつ、今日はもういいよ。奥さんが料理作って待ってんでしょ？いいね〜新婚さんは。」

部下「あつ……………ま〜そ〜なんですけど……………」(照)

隆「今日は早く帰って、ゆっくり家族サービスしろよ。」

部下「はいっ、ありがとうございます。でも社長は？」

隆「僕も今日は帰って、たまには、ゆっくり休むよ。」

急いでばかりいても、見えないモノってあると思うしね。」

部下「そうですね〜。」

以前の僕なら、こんな状況は決して許されなかったのかも知れない。でも僕が少し変わったんじゃないかって思う事、それは……………。

誰かの立場になってほんの少し、考えられる様になった気がした事。僕とみきは幼馴染だと言う以外、それ以上恋人になれた訳でも何でもなかった

んだけど彼女の思いは、僕や他の幼馴染を通してきつと今も生き続けてい

るんだと思った。誰かの立場を考えられる事、そして自分をも大切に出来る事。

そんなゆとりを、みきによって与えられた気が……。

>>残された者への道導<<

僕の中に住むみきが、今も変わらずあの小さな暮らしの中で、息づいた

決して色褪せる事のない木漏れ日に包まれたままで……。

僕の忘れかけていた思いや、他の誰かに対する、小さな優しさを今もずっと

発し続けている。最期まで必死に生きたみきの死は、決して失しなかったものなんかじゃ

なく、たくさんのものを残し与えて生き抜いたと言う事。それは残されたものが誰かに

そして自分自身に対しても、もっと強く、優しく生きると言う事を全う出来る為に

目には決して見えないけれど、掛け替えのない大切なものを、心の中に今も感じて

いるから……。今はみきを思い出す度に、僕は微笑み続ける事が出来るのだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8424g/>

---

色褪せない木漏れ日に。

2011年10月5日23時34分発行